

2型糖尿病患者降圧薬治療時の自動血圧計による動脈硬化指標(AVI,API)による評価

¹埼玉医科大学総合医療センター 内分泌・糖尿病内科

森澤 智子¹,阿部 義美¹,的場 玲恵¹,坂下 杏奈¹,秋山 義隆¹,森田 智子¹,皆川 真哉¹,矢澤 麻佐子¹,和田 誠基¹,小池 美江¹,大村 栄治¹,松田 昌文¹

【目的】2型糖尿病患者管理において高血圧への介入は血管合併症進展予防の面で重要であるが、介入評価を単に血圧のみでなく従来の動脈硬化指標により評価することは医療資源を有効に活用する面からは困難がある。自動血圧計Pasesa®による動脈硬化指標AVI(Arterial Velocity pulse Index)とAPI(Arterial Pressure volume Index)は簡便に血圧測定のみで動脈硬化を評価することが可能である。そこで アンギオテンシン 受容体拮抗薬を投与した場合の効果をAVIとAPIを用い検討した。【方法】当科外来患者で血圧管理が十分でない患者にオルメサルタン20mgを投与し投与前後での血圧変化と動脈硬化指標を測定した。オシロメトリック血圧測定による動脈硬化分析は脈波指標付き電子血圧計Pasesa®(志成データム,町田市,東京)を用いた。血管動脈硬化指標は2回以上測定し平均値を算定した。AVIは心臓に近い血管の硬化度、APIは末梢血管の硬化度を反映するとされ、血圧測定値の脈波の変化により自動的に計算される。【結果】治療対象は14名(M/F=10/4,年齢 60.2 ± 11.3 歳, BMI: $27.0 \pm 5.2 \text{ kg/m}^2$, HbA1c: $6.9 \pm 1.2\%$, 罹病期間: 12.4 ± 6.8 年)で介入前の血圧, AVI, APIは $155 \pm 32 / 95 \pm 13 \text{ mmHg}$, 25.0 ± 5.7 , 40.2 ± 12.1 であった。平均38週の介入後にそれぞれ $136 \pm 36 / 88 \pm 17 \text{ mmHg}$ $p < 0.05$, 21.3 ± 6.6 $p < 0.05$, 38.0 ± 10.5 $p: \text{n.s. (paired } t\text{-test vs 前)}$ となり血圧とAVIは有意に改善しAPIも改善傾向が認められた。【総括】動脈硬化指標の継時的な変化の評価管理は推奨されるが、外来診療ではPWVのような測定を頻回に行うことは困難である。AVI,APIのそれぞれの意義は議論があるが心血管系への介入効果の指標となる可能性があることが示唆された。